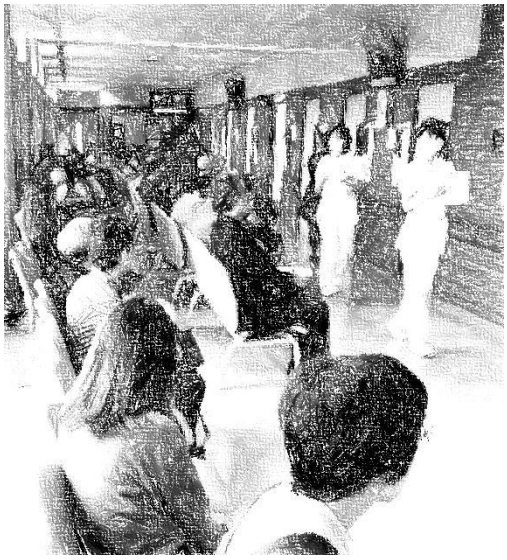
＜2018 年 11 月＞

検査で感じたこと

国保連合会嘱託　東田（ひがしだ）　文男（ふみお）

秋晴れのシーズンなのに、毎年このころになると気分が滅入る。というのも、定年直後に受診した人間ドックで見つかった身体の「悪い場所」の経過観察の検査が、この時期に重なるためだ。しかも病院は別々である▼もちろん検査時期をずらすことはできるのだが、悪いところがあるなら同じ時期にまとめて診察してもらったほうが気も楽だという、いたって身勝手な理由によるのだが、年を重ねるたびに体もお金も負担になってきた。今年検査した場所は、頭部にはじまり、腹部、大腸、そして目である。検査で気づいたことをちょっと書いてみると―▼ 脳のMR検査では、音がうるさいことよりも、あの筒状の閉鎖空間の息苦しさがたまらなくなってきた。目をつぶり、他のことを考えるようにしているのだが、最近はどういうわけか「火葬」の状態をふと思い浮かべてしまう▼大腸の内視鏡検査では、検査前に腸管内をきれいにするため大量の下剤を飲まなければならない。部屋に患者５、６人が集められて飲むのだが、早く飲み終えたいものだから、いきおい飲み比べ競争となる。それが終わったら今度は排便後の腸のきれいさ比べである。無意味な競争だと思いながらも、遅れると焦りを感じてしまうのだ▼眼科では、患者の多さにいつも驚かされる。目の検査をした後、2～３時間待った後の診察はまさに３分程度。受診前に血圧結果を提出しなければならないのだが、カーテンの囲いもなくむき出し状態での血圧測定だ。数値に一喜一憂しがちな高血圧の当方にとっては、個人情報が見られていると感じてしまい、血圧がますます上がってしまう▼高齢者の医療費の増加による「2025 年問題」が大きな問題となっている。できる限り現役世代に負担をかけないようにしたいと思っているのだが、買ったばかりの新しい手帳（2019 年から３年連用）にまず記したのは、新天皇即位に伴う黄金週間の 10 連休？と次回の検査予約だった。